

観光開発と伝統文化のはざまで

ペルー・チチカカ湖

清水達也

ペルー南部のチチカカ湖畔の街プーノは、アンデス山脈のまん中、標高3850mに位置する。1998年10月末、私は観光のためこの地を訪れた。ペルー第2の都市アレキパ（標高2360m）から高度に慣れるようにと、飛行機ではなくてバスで10時間かけてやってきたが、ひどい高山病にかかり嘔吐と頭痛に悩まされた。ホテルのオーナーや現地の医者世話になり、さまざまな薬を飲んで少し回復したところで、チチカカ湖に浮かぶウロス島観光ツアーにでかけた。

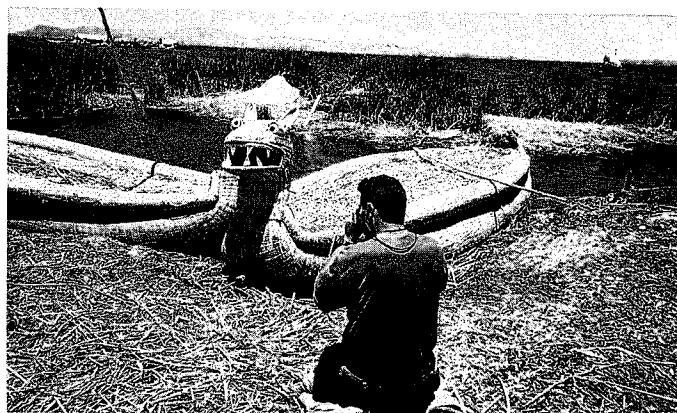
朝晩はセーターにコートが必要なくらい冷え込むが、標高が高いので日差しは強い。日が高くなるに連れて気温も上がり、サングラスと日焼け止めを持ってこなかったことを後悔した。船には日本人の夫婦のほか、東京の病院で研修をしたことがあるというボリビア人の医師、三重県で働いていたというリマ出身のペルー人、スペイン人のカップルなど約10人が乗り込んでいた。

プーノの街から船で30分も進むと、湖に自生する葦のような草、トトラでできた浮島が見えてくる。本当に浮いていて流されないように固定されている島もあれば、もともとトトラが生えていた浅瀬に刈り取ったトトラをブロック状にして乾か

したものを積んで陸地を作った島もある。私たちが上陸したのはウロス島のひとつ、サンタマリア島。直径が30m弱で、中央の広場を取り囲むように約10戸のトトラ製の家と、船着き場、展望台、トイレ、博物館などがならんでいる。いくつかの家の脇には長さ3mほどの棒がくくりつけられており、その上に太陽電池が設置されていた。太陽電池で作られた電気では夜間の電灯とラジオの電気をまかなっているという。

船から一歩足を踏み出すと、草でできた地面は柔らかくて足が少し沈んだ。跳ねると周辺の地面が揺れる。ガイドの話をじっと聞いていると、「場所によっては一カ所にたっていると足元がだんだん沈んで水がしみるから、少しずつ動くように」と注意された。私が訪れた時には3台のボートから日本人の団体ツアー客などが訪れており、彼らを相手に広場で島の人が刺繍のタペストリ、アルパカのセーター、アクセサリーなどのお土産品を売っていた。

ガイドの説明を聞いた後、全長5mほどのトトラ製の船、バルサに乗船した。トトラを丸太くらいの太さに束ねたものをいくつも組み合わせて造った船で、船自体にかなり重量があるようで結構



サンタマリア島

観光用のバルサ（トトラ船）には、
リヤマのような頭がついている。

安定していた。船頭も含めて6人がのっていたが、10人くらいまでなら乗れるという。15分かけて島を一周して乗船料は2ソル（80円）。船頭の話では、このバルサの寿命は8カ月から1年くらいで、毎年新しいのを作るという。われわれの乗ったバルサは櫓で漕いでいたが、トトラや布で作った帆を備え、風の力を借りて走るバルサもある。古くなったバルサは島の端に放置され、そのまま島の陸地の一部になる。

広場に戻り民芸品を見ていて鮮やかに彩色されたアクセサリーを見つけた。一つ2ソル。三つ購入したが小銭がなかった。そしたら土産物売っているおばちゃんがすかさず「ドルでもいいよ」と言ってきた。チチカカ湖の島でドルが通じるとは思ってもみななかったが、ここはやはり観光地。ドルに対するソルの価値が少しずつではあるが目減りしていくことを、島の人知っているのだろう。30%ほどのミニチュアのバルサを売っていたので「これでは乗れない」とからかったところ、「奥に全長2メートルくらいで人が乗れるバルサがあるが、見てみるか」と言われた。はにかみ屋のように見えても商魂はたくましい。

チチカカ湖はペルーとボリビアにまたがる面積

8300平方キロの湖。長さ160キロ、幅60キロ、水深が最大で280メートルで、60%がペルー、40%がボリビアに属している。船が航行する湖としては世界で一番高い場所にあることで知られている。プーノの街にある港には貨物船が停泊していたが、これは太平洋岸の港でバラバラに解体され、陸路をプーノまで運ばれてもう一度組み立てられたものだという。

プーノの街に近いチチカカ湖は水深が数メートルと浅く、トトラもあちこちで自生している。サンタマリア島のようないわゆる浮島がウロス島のなかに全部で42あり、このうち約半数が観光客向けに開放されているという。そこに住む人々は伝統的に漁業を営み、それをプーノなど周辺の町の市場で農産物をはじめ必要な物に換えてきた。近年になり観光客が増加し、漁業に加え観光業が島の人々の生活を支える主要産業の一つとなった。開放している島々では、観光客のために展望台や博物館を作り、民芸品を作って販売している。また、伝統的なバルサにはない、リヤマの頭に似た装飾を付け加えたりしている。

チチカカ湖の周辺ではもともとアイマラ語を話す人が多いが、島で観光客を相手にする人はスペイン語も話す。子供たちは島の学校でスペイン語も習っており、仲間内ではアイマラ語、外の人と

観光開発と伝統文化 のはざまで

ペルー・チチカカ湖

はスペイン語と使い分けている。

観光客が島に降りると、子供たちが何となく近寄ってきて写真に収まり、あからさまではないがものほしそうな顔をする。あらかじめガイドに「写真を撮ったりすると、島の子供たちが何かねだるかもしれないが、そんなときはお金やお菓子ではなく、パンやフルーツ、ボールペンをあげてほしい」と言われてみかんを買っておいた。パルサで一緒にのってきた子供にひとつあげた。

地元出身のガイドのティントは「チチカカ湖に住む人には、彼らなりの価値観があるということを覚えておいてほしい。彼らは観光客が着ている服装や、街のくらしにはあまり興味がない。観光客の皆さんは自分たちの価値観で彼らを判断しないでほしい」と言っていた。

観光客としても、チチカカ湖の人がいつまでもトトラの浮島に住み、パルサに乗って漁をするという生活を守る姿を見たいと思う。観光によって島が潤えば、街に出稼ぎに行く必要もなく、伝統的な生活を続けていくことができるかもしれない。

しかし観光開発が進めば、世界中からやってくる観光客が増えて「外の世界」に触れる機会も多

くなる。観光による収入が増えれば、すでにあるラジオ以外にも、テレビや電話が導入されるのも遠い話ではない。さらに子供たちは学校で新しいことを学び、自分たちの生活がほかの世界と比べてずいぶん違うことに気がつく。そうすればチチカカ湖の人々の価値観も変わっていくだろう。もしかしたらすでに変わっているかもしれない。

観光開発と純粋な伝統文化の保存は両立するだろうか。自分も含めて外国や都市からボートに乗った観光客が大勢やってきて、そこに住む人々やトトラ製の家、船の写真をパチパチと撮影しながら、彼らを「見せ物」として扱っているような引け目を感じながら、そんなことを考えた。

(しみず・たつや／地域研究第2部)

タペストリ、アクセサリーなどの土産物を売っている広場を囲んで一〇戸ほどのトトラ製の家が建っている。

